

「愛には偽りがあってはならない2」

～親切〔慈愛〕に生きる～

ローマ12:14～21

■ 愛の性質

神さまの性質を表す言葉には、愛・真理・義などありますが、その中に「親切」口語訳では「慈愛」と訳されているものがあります。この親切とはどんな意味が分かりますか？それを知るためにまず、愛の性質について知っておきましょう。◎愛には偽りがあってはなりません。1. 迫害する者を祝福する。2. 3. 喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣く。4. 思い一つにする。5. 高ぶらない。6. 身分の低い人々と交わる。7. 悪をもって悪に報いない。8. すべての人が良いと思うことを図る。9. すべての人と平和を保つ。10. 自分で復讐しない。11. 敵にパンを与える。12. 善をもって悪に打ち勝つ。イエスさまが十字架にかかるためにこの世にお生れになった理由は、私たちの愛から外れた行動をおさめるためです。この愛から外れた行動をおさめる方法が、この「愛から外れた行動を自ら受ける」でした。また、泣く者と共に泣くことはできても、喜ぶ者と共に喜ぶことができず、「愛に偽りがあってはならない」と書かれています。しかし、自分の中に高ぶりがあり、悔しい・嫉妬心などから相手と共に喜ぶことができず、でも、その喜びに対して面と向かって否定できないので心と行いが違っている偽善が出てしまいます。だから思い一つにしなさいと聖書に書かれています。高ぶりがあると思いを一つにできないので、身分の低い人々と交わりなさいと言われています。この人々に向けている視線を自分に向け自分の罪に気づきなさいと言われていました。自らに罪があるから人を裁くことはできません。裁きは神さまがされます。ですから、悪をもって悪に報いず、すべての人が良いと思うこと…御霊の九つの顕れ(愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制)を図るのです。これはすべての人が賛成することではありません。だから、すべての人と平和(相手と向き合う)を保ちなさいと言われていたのです。相手と向き合っ腹が立った時に自分で復讐しない。これは、神さまが自ら犠牲になって私たちに罪を示されているのです。そして私たちは聖餐式でその恵み…パンが与えられています。これらの結果、善をもって悪に打ち勝っているのです。それは、敵の頭に燃える炭火を積むこと(問題があることに気づかせること)になっているのです。

■ ◎親切とは

辞書には『親を切る』という意味ではない。「親」は「親しい」「身近に接する」という意味で、「切」は刃物をじかに当てるように「身近である」「行き届く」という意味がある。つまり、身近に寄り添い、行き届くようにすることが「親切」の意味である。また、思い入れが深く切実であることの意味では「深切」が用いられ、漢語ではこの意味で用いられることが多かったため、古くは「深切」の字が常用されていた。「親切」や「深切」のほか、当て字として「心切」の漢字も使われている」と書かれています。「慈愛」を新改訳聖書で「親切」と訳したかと言うと、神さまの性質がこの字のとおりだと当時の学者たちが思ったからです。では、神の性質とは何でしょう。親切はヘブル語でヘセドと言ひ、旧約聖書で248回使われている「親切(に)」「あわれみ」「恵み」「徳行」「忠実・真実」などと訳されています。新約聖書において、ギリシャ語のクレーストースは、「親切」「慈愛」「いづくしみ」「善良」などと訳されており、その意味は「優しい気遣い、心と行動の親切さ」です。別のギリシャ語の言葉でアガトスネーは、「善意」「善」と訳され、心と人生の高潔さを示す。親切と善意には密接な関連があり、同じ意味で用いられる。他の人の必要に応えたいという積極的な願望を表しているのです。親切(kindness)は他の人の幸せを心から願うことであり、善(goodness)はその幸せを促進するための行動です。親切は、神[HS]によって生み出された性質であり、物質的であれ、心理的・情緒的・霊的であれ、他の人の必要に気づかせるものです。善は、親切が実行に移され、言動となったものなのです。これは聖書的な親切の意味です。

■ ◎聖書的親切…刃物をじかに当てるように、身近に寄り添い、行き届くような行動をとった人々

サウルはイスラエルの初代の王で栄えていました。忠実なしもべであるダビデによりペリシテ人に勝利し益々栄えましたが、ダビデの名將ぶりや人々からの人望に嫉妬します。嫉妬は親切の真逆です。しかしサウルの息子ヨナタンは、サウルと違いました。ヨナタンはダビデを非常に愛しました。サウルはいつも嫉妬に心を苛まれていました。しかしヨナタンは嫉妬ではなく友としての愛を貫きました。親子でもぜんぜん違う生き方をしました。そして、このヨナタンの子どものメフィボシュテは苦しい人生を歩みます。父ヨナタンが戦死してしまいます。その悲報がもたらされた時、乳母がヨナタンを抱いて逃げました。しかし、あまり

急いで逃げたので、この子を落とし、そのためにこの子は足なえになってしまったのです。その後混乱から逃れて、「ロ・テバル」と言われる「不毛の地」「空虚な、満足のない地」で、ひっそりと隠れて生活していました。戦いが終わり、神の恵みを受けたダビデが自分の過去を静かに思い返した時、ダビデは「ヨナタンのために、ヨナタンの子孫に恵みを施したい」と思い、彼を見つけて自分のところに連れてきます。その時メフィボシュテは「このしもべが何者だというので、あなたは、この死んだ犬のような私を顧みてくださるのですか。(IIサムエル9:8)」と言うのです。なぜメフィボシュテがこのような発言ができたかと言うと、ヨナタンの生き様にあります。ヨナタンは、嫉妬するサウルの生き方を見てそうあってはならない、愛を選ぼうと真逆の生き方を選びました。ヨナタンの息子メフィボシュテは、この人生をかけて愛を貫いた父親の生き様を見て学んでいたのです。ヨナタンはこの思いを息子メフィボシュテに継承して、ダビデはその約束を果たして彼を王宮に呼び、サウルが持っていた地所を彼に全部渡したのです。ヨナタンの行いによって家全体が再興されたのです。その後、しもべがダビデにメフィボシュテのことを悪く報告し、ダビデは一度彼の地所を取り上げますが、メフィボシュテは「王さまが無事に王宮に帰られて後なら、彼が全部でも取ってよいのです。(IIサムエル19:30)」と言うのです。結果、メフィボシュテとしもべで地所を分けてメフィボシュテの子どもは子々孫々続くのです。ダビデの神を愛する姿勢に対する、神が愛された人(ダビデ)に施された恵みが受け継がれることを示しているのです。メフィボシュテの生き様は、父親のヨナタンが愛し合おうとする「親切」の行為が子々孫々にまで影響をもたらしたと言うことです。聖書が私たちに霊的礼拝を捧げよと言う理由は、神さまの計画が私たちの人生を通して成るためですが、それ以上に私たちの次の世代にこの愛が保たれるようにするためです。

■ ◎神は親切に私たちに向き合う

ナチス・ドイツの強制収容所において家族全てを失ったコリー・テン・ブームさんが語った言葉です。『神と共に生きる人生について「もし憂鬱な気持ちになりたいのなら、自分の内側を見つめてればよい。もし打ちめされた気持ちになりたいのなら、自分の過去を見つめてればよい。もしどうして良いか分からない気持ちになりたいのなら、自分の周囲を見つめてればよい。でももしそれら全てから解放された人生を歩みたいのなら、自分の上を見上げたらいい。そこにはあなたを見つめておられる神がおられる。』神はあなたの問題の真ん中で、あなたと共にいてくださるのです。』聖書は、必ず神が親切に私たちに向き合うと伝えています。そして、その神の親切を見出すためにどう生きるべきかを教えてくれているのがローマ書12章なのです。私たちが親切に生きようとする時に初めて、その神の親切が見出せるようになっているのです。愛は受けたから他者へ与えられるのです。自らがその愛の実践し示すために2000年前に十字架にかかれたのです。そしてこの愛の実践は、自らが過酷な苦しい道を選ぶことを通して、私たちがそのような道にある時にも勇敢であれと伝えるためであったのです。その道を歩もうとした時、神がどれほどに私たちが愛しているかを知ることができるのです。

まとめ

ダビデの性質は神を愛する姿。それが飛び火していく。次の世代へも恵みが繋がっていく。神は必ず親切に私たちと向き合っ下います。神の親切を見出す事が出来るのがローマ書です。私たちはこの「愛に偽りがあってはならない」ポイントの一つでも実践しようとする時に初めて自力でできないことを知ります。そして自力でできないことを知った時初めて神さまの愛がどのように貫かれたのかを学ぶのです。その道を探す方法がこの12のプロセスです。この12のプロセスを実践する力を神さまに願ひ求める心を持つことができるように神さまに願ひましょう。この愛(12のプロセス)を実践する時初めてキリストが十字架で愛の実践をしたことが分かるのです。愛に偽りがあるままだと本当の愛を知ることはできません。神と一緒にいる方法である礼拝を求め、平安であろうとする時に、生きる行動すべてが礼拝になっていきます。これが霊的な礼拝なのです。その生き様はダビデやヨナタンのようにこの世に飛び火し、次の世代へも恵みが繋がっていくのです。できない実践をしようとするときに、十字架を乗り越えた神の力が注がれます。ですから、愛の実践を行っていきましょう。

(要約者:行司 佳世)

(2019年11月17日)